

金環日食・中国の旅

千葉市立郷土博物館 多賀 治 恵

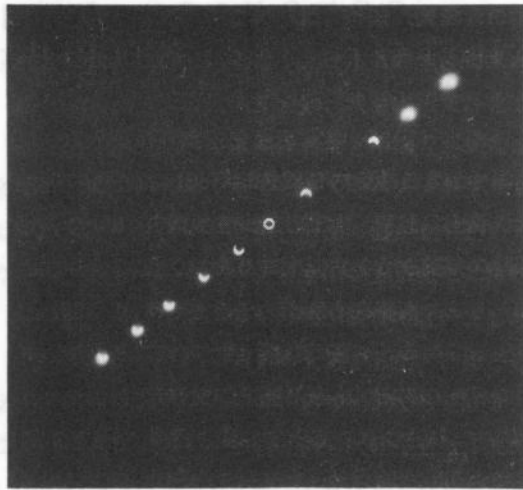
1987年9月23日の金環日食は中国江蘇省南通市(東経121°、北緯32°)で観測したので、その概要を報告します。南通は上海の北、直線距離で100Kmのところ、長江(揚子江)の河口近くにあり、古くから防績の盛んな工業都市であり、また史跡の多い歴史の古い都市でもありました。上海から高速フェリーに乗れば2時間くらいのところですが、我々のグループは、これに乗り遅れ、遠々と5時間ほどバスに乗り、ぎりぎりのところで長江を渡るフェリーの最終便にすべり込み、市内のホテルに着いたのは夜10時頃でした。日本で5時間も車に乗れば、景色も変ってくるものですが、中国では遠々と同じ景色が続く、茶色の大地がはるかかなたまで続いておりました。同じような家並もずーと続き、どこにでも人が住んでいて、自転車が走り回っております。大地の広さと人の多さにまぎれつき致しました。長江でながめた星空もすばらしく、銀河やM31が楽に見えました。中心線に近い南通には、天文ガイドや月刊天文のツアーの他、フリーのマニアなど観測を目的にやってきた人が50人くらい、それから観光が目的で、ついでに日食を見に来た人が100人くらい、あわせて150人くらいの日本人が集まりました。こんなに日本人が大勢やってくるということは、前代未聞ということで市をあげてレセプションを開いて下さいました。あちらの市と県は日本の逆で、市の中に県があります。副市長さんをはじめ、市の要人の方々がずらりと列席して下さいました。また、この日食にひっかけ、中国南通民間芸術祭も行なわれておりました。

さて観測地は南通市のはずれにある広い公園で、ふだんは市民の方々の憩いの場所ですが、

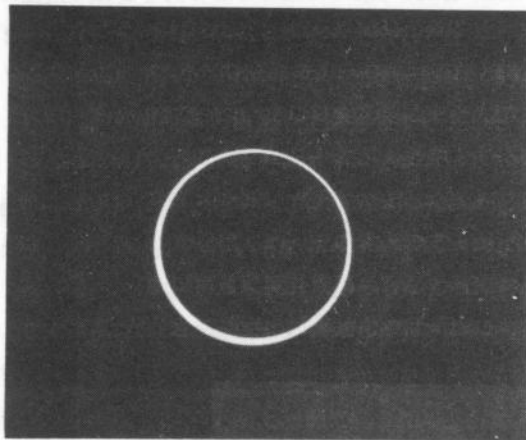


中国・南通市での観測風景

この日は、外国人観測者のために貸切となり、日本人の他、欧米人が10~20人くらい、紫金山天文台をはじめ、報道関係者など中国人が30人ほどで合わせて200人くらいが集まりました。当日朝、一面に雲が立ち込めていましたが、日食の始まる前には晴れ上がり、時おり雲が流れてはいましたが、まあまあ天気でした。日本との時差は1時間、現地時間で8時35分、第1次接触、「あっ欠けてきた、欠けてる」との声があちこちから聞こえてきます。9時50分ごろ食分0.8、気温も少し下がったようで涼しくなってきました。10時02分、第2次接触、5cm 700mmの直焦点で撮影していましたが、その直前にベイリービーズが見え感動しました。3分半の金環食時にはワーワーという歓声だけがずーと続いていたようです。さて10時半ごろ食分が0.7でまた太陽がじりじりと照りつけ始め、いつ頃からか声をひそめていたセミがまた一勢に鳴き始め、あたりが日常の風景にもどっていくように感じられました。日食は、ほんのひとときではあ



「9時14分から10分おき」 エクタローム64



10時03分、5cm 屈折(F14)にて
ND 400+ND8 1/250秒

りますが、そこに異質の世界を創り出すインパクトのある現象であることが実感できました。

さて、無事に観測も終わりあとは観光です。天文関係では、現存する最古の石刻した星図が蘇州博物館にあるということで訪ねましたが、オリジナルは国宝で保管のためしまっており、ということで残念ながら見られず、拓本をみてきました。それから、南京の紫金山天文台を訪れ、天球儀、圭表など昔の観測機器を見学しました。蘇州、南京、上海とそれぞれの都市に特色があり、また通訳さんの話もおもしろく、「中国は男女平等の国で、私もこうして昼間は仕事をし、家に帰ると皿洗いや子供の世話などしなければならぬのです。日本の男性は家では何もしなくていいのですからいいですねー」とうらやましがると、「それはとんでもない誤解です。私もちゃんとやってますー」と某科学館の先生から反論もでて楽しい旅を致しました。